



「俳句」

いまや俳句は大流行。国勢調査のついでに俳句人口も調べてみたくなるほどだ。

かく言う私もじつはその一人。もっとも私の場合、一晚の会食とそれに伴う歓談がお目当てで、べつだん俳句に命を懸けているわけではない。トランプなんかと変わらない遊びだと思っている。それでも自分の俳句が選ばれればちよつと嬉しいし、ぜんぜん無視されれば内心ムツとする。帰り道で人生について考え込んでしまったりもする。

「俳句研究」一〇月号で三浦雅士が「俳句・現代詩戦争」と題して、俳人に現代詩への転向を薦めている。それを読んで快哉を叫んでしまった。私が最近、句会で地を這うような低迷が続けているからではなくて、その論調の潔さにある。

彼の言うところはこうだ。芭蕉はボードレールよりも早くモダニズムを説いた先駆者であって、その後を継いだのは子規や虚子であるよりも朔太郎、賢治、中也だった、と。

思うに、文学としての俳句は瓦礫の山に時として背筋が寒くなるような一句が混じっているといたもので、それは小説でも詩でも同じことだ。ほんものの文学などという代物は、そんじよそこらに転がっているものではない。

しかし私が俳句が嫌なのは、そしてだから好きなのは、変に人の温もりがあるとところだ。三浦のこの文章も「俳句とわたし」という



「俳句」

ご祝辞のような連載コラムで、いつもは知名人が俳句にまつわる暖かいエッセイを寄せている。そこへ、こうもあっけらかんと明解な反対演説をぶつとは胸がすく思いである。

「だいたい、何が写生だ。」 そうだ、そうだ！

初出：毎日新聞「マガジンラック」二〇〇〇年十月
ホームページ掲載：二〇二一年五月